

没理想論争注釈稿(一)

坂井 健

はじめに

没理想論争に関する論は、今までに相当数出されている。⁽¹⁾しかしながら、それぞれの論が、細部の解釈について、共通の理解を持った上でなされているか、といえ、必ずしもそうとも言えないように思える。論争全般にわたる論は、細部の解釈に立脚するものでなければならぬことはいうまでもない。したがって、こうした論は、没理想論争全体にわたる細部の注釈とその検討をまっぴら言なされるべきものであろうが、そのような注釈や検討は、必ずしも十分に為されているとはいえない。無論、先学による貴重な業績があり、本注釈で取り上げる評論にも既に、注釈がなされているものが多い。しかしながら、それは没理想論争の一部を取り上げたものに過ぎず、鵬外逍遙という論争主体両者に及ぶものではない。したがって、筆者のごとき浅学の者であっても、一人の人間が、この論争全般についての、鵬外・逍遙両者にわたる注釈を、たとえ叩台としても企図することにいくらかの意義はあると思われるのである。

なお、先行の注釈と重複する箇所について、同様の内容である場合には、語釈及び固有名詞に関する注釈は最小限にとどめることにする。

(1) 昭和三五年までの文献ではあるが、谷沢永一「没理想論争研究文献史」(『明治期の文芸評論』八木書店、昭和四六)は網羅的である。

シエークスピア脚本評註緒言⁽¹⁾

シエークスピア⁽²⁾が脚本と称せられたるうち、確かに彼れが作と定まれるもの、およそ三十六篇に余れり。一千五百八十八年(作者二十四歳の時)より一千六百十三年までの作なり。作者は一千五百六十四年に生まれて、同六百十六年に五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の時なりしならん。すなはちシエークスピアが著作の時期は、およそ二十五年なり。そを、彼が作に現われたる伎倆、結構、着想等の異同を元として大別すれば、四期となる⁽³⁾。第一期は彼れが修業期ともいふべき時にて、即ち諷刺諧談を主としたる喜劇と、『ロミオ・エンド・ジュリエット』の悲劇とを作りし時代なり。第二期は史劇と快活なる喜劇とを作りし時代、第三期は深刻なる悲劇と表は快活にして裏は嚴酷なる喜劇とを作りし時代、第四期は沈静嚴肅にして、しかも優美爽快なる悲喜混交の劇を作りし時代なり。シエークスピアの著作は此の四期に於て著き異同あり。着想の優劣はいふまでもなく、伎倆、結構にも著き差異あり。此の故に、シエークスピアを知らんとせば、少くとも、此の四期に就きて、おの／＼二篇づつは読まざるを得ず。例へば、第一期の代表としては、彼れが処女作とみづから称せし『ギーンナス・エンド・アイス』といふ叙事の詩、兼ねては『ロミオ・エンド・ジュリエット』など、第二期の代表としては『キング・ジョン』、『ヘンリー四世』、『リチャード三世』など。又『マルチャント・オブ・ベニス』など。第三期の代表には、所謂四大悲劇『ハムレット』、『マクベス』、『リリーヤ』、『オセロー』など。第四期の代表には、『テムベスト』、『ウインタース・テール』など。但し是れは只予が卑見によりて選りいでたるのみ。選択は人々の見る所によりて異なるべし。

(1) シエークスピア脚本評註・『早稲田文学』創刊号(明治二四・一〇)巻頭に掲載。のち『マクベス評釈』の緒言」と改題されて『文学その折々』(明治二九・九)に収録。『シエークスピア脚本評註』及び『我にあらずして汝にあり』(明治二四・一一)に対して露外が「山房論文／其七 早稲田文学の没理想」、「山房論文付録／其言を取らず」(『しがらみ

草紙」明治二四・一二)で駁論を加えたのを没理想論争の端緒とするのが一般である。定説に従って、とりあえず「シェークスピア脚本評註」より注釈を始めることにするが、没理想論争の前哨戦はさらに遡ることができる。重松泰雄「没理想論争」(『解釈と鑑賞』昭和四五・六)は、逍遙の「小説三派」(明治二三・一二)、「梅花詩集を讀みて」(明治二四・三)、「梓神子」(明治二四・五六)及び、これらに対する囀外の「山房論文／其一 逍遙子の新作十二番中既発四番合評」については、日本近代文学大系「坪内逍遙集」(角川書店)に、「山房論文／其一 逍遙子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及梓神子」は同じく日本近代文学大系「森鷗外集」(角川書店)、及び三好行雄による近代文学注釈大系「森鷗外」(昭和四一、有精堂)に詳しい注釈がある。なお、谷沢永一「論理に勝って気合い負け逍遙」(『新潮』昭和五六・八)は、『しがらみ草紙』の創刊時(明治二二・一〇)にすでに『小説神髓』への批判があったと指摘。小倉斉「囀外・逍遙対立の淵源」(『淑徳国文』昭和六一・一)は、特に「現代諸家の小説論を読む」(『しがらみ草紙』明治二二・一〇)を取り上げて、『小説神髓』に対する批判意識を指摘している。

(2)

シェークスピア・逍遙の没理想論はシェークスピア研究と近松の世話物批評の過程で成立した。石田忠夫「坪内逍遙研究」(昭和六三年、九州大学出版会)は「没理想論は、人情を如何に描けば作品は普遍性をもつのかという課題に対する答えであった。個と普遍の問題に対して、個がその個性を客観に埋没させることによって客観性という普遍を獲得しようと考えたのである。(第一部六章)」と指摘する。なお、以下の人名、作品については、日本近代文学大系を参照されたい。

(3)

それを……四期となる・近代文学大系はダウデンが、シェークスピアの劇作史を、修業期、飛躍の時、悲劇時代・完成期の四期に分けたことに従ったのではないかとする。

①シェークスピア研究の方法よりいへば、第一期、第二期と順序を追うて評釈するかた穩当なるべけれど、思ふ由あれば、態と第三期の作よりはじむべし。其の故は、第一期の作には、語呂、口合等多ければ解釈すればとて、英語を知らぬ人には、到底会得せらるまじき故なり。而して此の註釈は英語を知らぬ人にも、多少の参考になれかしとするなれば、予が本意にたがへり。さて又第二期の作も喜劇を置きていへば、英国史に疎き人に

は、興味甚だ深からず。且つは歴史上の管々しき註釈を加へんもうるさし。加之、伎倆も、着想も第三期のに劣りたり。所詮、本釈の主旨はシェークスピアの本体のあらましを、普く邦人に知らせんといふにあれば、先ず傑れたるを取るかた至当なるべしとて、終に四大悲劇の随一なる『マクベス』劇をえらぶことゝしたり。

(1) 思ふ由・理由は以下に述べられるとおりであるが、その理由に、文学の表現自体と切り離して、そこに現われた「理想」・人生観を重視する逍遙の文学観を見ることができよう。

(2) 此の注釈は……するなれば・ここからも分かるように学問的著述というより、初学者むけの内容であることが分かる。鵬外の批判など思いもよらなかっただろう。

(3) シェークスピアの本体・逍遙の考えでは、シェークスピアの作品の中に、隠されているが故に、かえって普遍性、客観性をもって現れている「理想」即ち「没理想」だということになる。

(4) 『マクベス』劇をえらぶことゝしたり・實際上の都合による選択もあるが、「人情」を重んずる逍遙の指向を見ることができよう。

或ひは大体を知らせんとならば、管々しき註釈よりは、縝密厳正なる翻訳を掲ぐるかた優れりといふ人もあるべけれど、そは予の如き謗才不文のもの、企及すべきことにあらず。此の故に、予は主に原文の字句を追うて、意義を解釈することに力め、必ずしも詞美を伝へんとせざるべし。読者もし真にシェークスピアの詞美を知らんとせば、原文に直接して会得せよ。予は只、語義を明らかにするのみをもて甘んずべし。

(1) 意義を解釈する……せざるべし・ここにも表現より内容を重視する姿勢がうかがわれる。「梅花詩集を読みて」(『読売新聞』明治二四・三・二二―二四)にも同様の考え方が見られる。竹盛天雄「没理想論争とその余燼」(『日本文学の争点 近代篇』昭和四四、明治書院)は「逍遙はいう。予は敢て詩形を評せざるべし」と。詩における「理想」の批評が、△詩形▽と切り離して遂行できると思っていた点、否、それこそ、最上の△批評神髓▽であると希求していた点が、はつきりと露頭しているのである。それはつまり、文学や芸術における△理想▽の美学的位置付けが視野に入つて

おらず、△理想▽というばあい、ただ物自体のような△理想▽が形象からひき離して論議できると確信していたように思われるのだ。」と指摘する。

評釈といふにも二法ありて、有りの儘に字義、語格等を評釈して、修辭上に及ぶも一法なり。⁽¹⁾作者の本意もしくは作に見えたる理想を發揮して、批判評論するも評釈なるべし。⁽³⁾予はじめは『マクベス』を義訳して、専ら第二の評釈の法を取らばやと思ひたりしが、又感ずることありて、むしろ第一義の評釈のかたを取るべしと決しぬ。其の故如何といふに、第二義の評釈、即ち「インタープリテーション」⁽⁷⁾は若し見識高き人に成れる時は、読みて頗る感深く、益もあるべけれど、識卑き人の手に成れる時は徒らに猫を解釈して虎の如くに言ひ倣し、迂濶なる読者をして、あらぬ誤解に陥らしむる恐れあり。こはシェークスピアの作の甚だ自然に似たるより生ずることなり。此の点は大切の事なれば、いはでもの論に似たれど、左に少しく弁じ置くべし。

(1) 修辭上に及ぶも一法なり・一見修辭に及ぶのが目的のように読めるが、あくまでもそれは手段であつて、それによつて作品に現れた作者の「理想」を感得させるのが目的である。なお、この方法は帰納的な文学批評の方法である。

(2) 理想・逍遙は「文学その折々」(明治二九・九)で「わが謂ふ理想とは(中略)所詮は作家が平生の経験学識等によりて、宇宙の大事を思議し、此の世界の縁起、人間の由来、現世間の何たる、人間の何たる、此の世界を統治する勢力、人間の未来の帰宿、生死の理、靈魂、天命、鬼神等に関して覚悟したところあるを、多少いちじるしくその作に現示したる、これをおしなべて理想といふなり」と述べ、「當時予が理想といふ詞に表せしめんとせし意は、略々此の三、四年來用ひせられたる世界観人生觀の意に同じ。」と回顧している。この「理想」を鵜外が超越的なイデーと解したことから論争は始まる。

(3) 作者の本意……評釈なるべし・(1)に対し、演繹的な文学批評の方法。

(4) 義訳・意訳によつて作者の本意や理想を發揮できると考えたこともあつたといつてゐるわけで、決して演繹的な文学批評の方法を否定しているわけではない。あとで「識卑き人」と述べてゐるように、自身に対する懷疑が帰納的方法を選ばせたのである。

(5) 又感することありて・主観的な批評に対する批判意識が主たるものだろうが、二葉亭の感化もあって懷疑主義に陥つていたことも影響している。

(6) 「インタープリテーション」・作品自体の解釈。字句の解釈ではない。

(7) 謙卑き人・一般論として述べつつ、自身を示唆。

(8) 迂闊なる読者・あくまで対象は教育されるべき初学者とされる。

(9) シェークスピアの作の甚だ自然に似たる・「自然に似たる」は、シェークスピアの作品の普遍性・客観性を評したものである。石田氏は「逍遙のいう「無形の世界」とは、具体的には「因果応報、道徳・善悪・義理人情・仁・慈」などであり、それらをすべて包み込む「自然」である。」と述べている。このように「自然」が「実」と同じではないことは、以下の逍遙の説明でも明らかであるが、逍遙自身「詩人の筆に上る世界二ツあり心の世界と物の世界となり。甲は虚の世界にして理想(アイデヤ・原文ルビ)なり乙は実の世界にして自然(ネチュア・同)なり」(「梅花詩集を読みて」というように、「自然」と「実」とは結び付けられやすい概念であった。ここに鵜外から「記実家」と決め付けられる原因の一つがある。

予がシェークスピアの作の甚だ自然に似たりといふは、彼れが描ける事件、人物が、實際のと同じとはあらず。彼れが作は読む者の心々にて、如何やうにも解釈せらるゝことの酷だ造化に肖たるをいふなり。人々試みに自然といふものを観よ。心を虚平にして観れば、自然は只々自然にして、善惡のいづれにも偏りたりとは見え(3)ず。固より意地わるき継母の如きものとも見えねば、慈母とも見えず。然るに、数奇失意の人は造化を怨み、自然を憤りて、此の世を穢土と罵り、苦界と非るなり。さて又得意の人は、之れに反して、造化を情深き慈母のやうに思ひて、此の世を楽園とも思へり。畢竟、人々の思ひ做し次第にて、苦とも楽とも見らるゝが自然の本相なり。此の故に、造化の作用を解釈するに、彼の宿命教の旨をもてするも解し得べく、又耶穌教の旨をもてするも解し得べし。其の他、老、莊、楊、墨、儒、仏、若しくは古今東西の哲学が思ひ／＼の見解も、之れを造化にあてはめて強ち当たらざるにあらず。否、造化といふものは、是等無數の解釈を悉く容れても余りあるなり。まことに茫として際なきは造化の法相なりと評すべし。(6) 祇園精舎の鐘の聲、浮屠氏(7)は聞きて寂滅為樂の響きなりといへれ

ど、待宵には情人が何と聞くらん。婆羅双樹の花の色、厭世の目には諸行無常の形とも見ゆらんが、愁ひを知らぬ乙女は、如何さまに眺むらん。要するに、造化の本意は人未だ之れを得知らず、唯、己に愁ひの心ありて秋の哀れを知り、前に其の心楽しくして春の花鳥を樂しと見るのみ。造化の本体は無心なるべし。さてシェークスピアの傑作は、頗るこの造化に似たり。上は審美の見識に富みたる学者より、下は一知半解の者までも、彼の作もてはやすは、一つは故人が激賞したるを伝へきゝて、雷同付加するにも因るならめど、一つは、彼の作、度量甚だ広くして、能く衆嗜好を容るゝこと、猶は自然の風光の万人を娛ましむるが如きに原くならん。パイロン、スキフトなどの作の、或人に喜ばれて、他の人に嫌はるゝとは、大いなる相違なり。否、たゞ衆嗜好を容るゝばかりかは。彼れが傑作は殆ど万般の理想をも容れて余りあるに似たり。是れ最も造化の本性に似たる所なり。彼れが作に關しての先輩の評論、解釈、今は百を以て算ふべし、而も其の見解はおのゝ多少背馳し、甚だしきに至りては(ハムレット)の人物論の如き(10)柄繋(11)相容れざるものもあり。蓋し造化の捕捉して解釈しがたきが如く、彼れが作の夢幻窮りなくして一定の形なく、思ひ做し次第にて、黑白紫黄、いかさまにも解せらるゝが故なるべし。此の故にジョンソン、コールリッジ以來、シェークスピアの作を評して自然の二字を用ひざりし者は稀れなり。予嘗てドラマの本体を底知らぬ湖に喩へしことありしが、近ごろダウデン氏の論文を見れば、シェークスピアとゲーテを大洋に比したるがあり。趣きはやゝ異なれども同じ理に帰着すべしと信ぜらる。所詮、シェークスピアは、仮令カーライルが評せし如く、一意「地球座」(12)の劇場へ看者を牽かんとて筆を執りきとするも、其の看者を牽く手段、自然詩人の本領に合ひて、俗文士が阿世の手段とは異なりたりしならん。或ひは彼れは、衆人心娛しません為には、直ちに人間の本相を描破するに如かずと冥識し、必ずしも一時に別びず、天稟の詩眼によく人間を觀破し、不偏公平の筆をもて、自然の有りのまゝを描きたりしならんか。案ずるにシェークスピアは我が近松門左衛門の大いなるものか。(13)指頭大の明玉と拳大の明玉、二者の差は度(14)にありて質にはあらざらん。たとひ其の質にも差等ありとするも、双つながら自然の寶石にして、人間の作為せしものにあらざらん。(15)自然の寶石なればこそ、能く自然の靈光を放ちて、野人をも駭かし、婦女子をも駭かし、卞和(16)をも駭かすなるべけれ、しかしな

がら、之れをもてあがめて城にも代ふべしと価づけたるは、人間の好事、贅沢がしたことにて、元をたゞせば徒の奇石なり。色々に値上げするは人間の好尚が嵩じてのわざなれば、或意味にていはゞ、買ひ冠なること勿論なるべし⁽²¹⁾。更に喩へて言へば、シェークスピアの作は無心無情の鏡の如し。其の作には何人の面も映るなり。明かにいへば、如何なる読者の理想も其の影を其の中に見出だすことを得べし⁽²²⁾。されば、ゲルギーナスも、其の理想をシェークスピアの作中に発見し、ウルリーチーも、其の理想を同じ作中に発見し、バックニルも、モールトンも、ハドスンも、ダウデンも、各々我が影をかしこに見いだし、シェークスピアばかり高尚なる理想を詩中に描けるは絶えて無し、とめでくつがへりて驚歎するなれ。げにや、シェークスピアは空前絶後の大詩人ならん。其の造化に似て際涯無く、其の大洋に似て広く深く、其底知らぬ湖の如く、普く衆理想を容るゝ所は、まことに空前絶後なるべし。しかしながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか⁽²³⁾。これのみの理由によりて理想高大なりといふは信けがたし⁽²⁴⁾。予ひそかに此の点を疑ひ、嘗て近松の世話物を取りて、をさゝ⁽²⁵⁾先輩の批評法に倣ひて、分析解剖を試みしに『天の網島』、『油地獄』さては『恋飛脚』、『伊達染手綱』など、いづれも予が小理想を包容して余れる所尚ほ綽々たり。当年の予が解によれば、『天の網島』の理想は、『ロミオ・エンド・ジュリエット』と兄弟の間にありて、更に可笑しき『油地獄』の解は、ほと／＼或理想家が釈したる『デムベスト』の理想をも凌がんとせり⁽²⁶⁾。勿論、こは理想の上のみの解なり⁽²⁷⁾。美術家としての伎倆の上には、其のこの予とても、二者を同じさまには見ざりしなり。これによりて案するに、近松もしエリザベス時代に生れて、英文にて世話物を書き残し、ニコラス・ロー出でて、そが伝を調べ、ジョンソン・ポー出でて、そが作を再版し、解釈し、称讃し、コールリッジ、ハズリット出でて、批判し、激賞し、マロン・ワーバートンらいでて評註し、近松研究会成りて、称讃し、アボット、シュミットらいでて、文典、字彙を作り、レッシング、ゲーテいでて、更に尊く、仏に、独に、米に、魯に、近松をもてはやすもの増加するに至りなば、たとひシェークスピアに及ばずとするも、是等多人数の功力にても我が国の浄瑠璃作者にて終らんよりは、はるかにまさりたる位置に上りつらんかし。其の故は、近松の世話物も、シェークスピアの作に似て、頗る自然に肖たればなり⁽²⁸⁾。斯くいへば

とて、シェークスピアを貶して、浄瑠璃作者の亜流なりといふにはあらず。彼が石は平凡の石の外ならずといふにあらず。非凡の宝石たることは争ふ可からざる事実なれども、只々其の値段付けは、人々の心々なれば、⁽³⁶⁾古人の理解を聞きて正に其の通りと思ふがその愚かなるをいふのみ。⁽³⁷⁾若しシェークスピアを称美せんとせば、其の人間の性情を活動せしむる伎倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の着想の妙、これをほめて空前といふも可く、絶後といふも可かるべし、唯々其の理想をはめて、大哲学者の如く高しといふは信⁽³⁸⁾け難し。むしろ其の没理想なるをたふすべきのみ。⁽³⁹⁾然るに、有と無とは二にして一ならざればにや、古人多くは没理想の作を、やがて大理想と解釈して、其の作者を神の如く、聖人の如く、また至人の如く評したるものあれど、⁽⁴⁰⁾没理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた没理想と見ゆることあり。⁽⁴¹⁾嬰兒の欲の極めて小なる是れ有欲(悪)とも見るべく、無欲(善)とも見るべし、⁽⁴²⁾鬼貫が一句、「なんで秋の来たとも見えず心から」此の一七字、強いて解釈の辞を作らば、或ひは仏教も掩ふべく、或ひは東西哲学の幾体系をも埋むべし。⁽⁴³⁾木内宗吾が一時の義挙も、若し花々しきマコーレーが筆を借りて伝を作らば、ハムデン、ウォシントンの輩と肩を並ぶる義挙ともなりなん。畢竟するに、鬼貫ら俳人の作には、当人の注釈無く、木内宗吾の義挙には詳伝無く、⁽⁴⁴⁾嬰兒の口には言語無きゆゑ解釈見る者の心次第なり。⁽⁴⁵⁾恐らくはシェークスピアと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉しくいへば、小説の体にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし。⁽⁴⁶⁾其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり。例へば、『キング・リーヤ』の悲劇は、馬琴の作に似て、勸懲の旨意いといちじめるしく見えれども、作者みづからが評論の詞絶えて篇中に無きが故に、見るものゝ理想次第にて、強ち勸懲の作と見做すを要せず。別に解釈を加ふること自在なり。しかるに、曲亭の作を見れば、例へば、墓六夫婦の性格の如き、頗る自然に肖て活動したれども、吾人はこれを没理想とは評せずして、勸懲の旨に成れりといふ。作者が叙事の間に明かに然いへればなり。芭蕉が『古池』⁽⁴⁷⁾の句に、様々の解あるも同理なるべく、『源語』⁽⁴⁸⁾の本文をいろ／＼に臆断するも、同理なるべし。此の例証尚ほ甚だ不足なれども、没理想の必ずしも大理想にあらずることゝ、小理想の時としては没理想とも見ゆる由は、之れにてはゞ知るべし。兎に角に、予は没理想の作を理

想をもて評釈するのといと要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評釈にては、主として打見たる儘の趣きを描写することを力め、我が一料簡の解釈をば加へざるべし。但し右とも左とも見らるゝ場合には、止むを得て古人の評釈をも引用し、予が卓見をも抒ぶることあらん。若し夫れ全体の解釈は、読者みづから之をなせ。理想、日本大ならん人は、日本国を『マクベス』の脚本中に見出だすべく、理想、宇宙大ならん人は、宇宙を『マクベス』の中に見出だすべく、理想万古に亘らんは、⁽⁵⁰⁾ eternity を『マクベス』の中に見出だすべし。没理想の詩の無限の興味は実に其の度量の大洋の如き所にあるなり。⁽⁵²⁾

(1) 予がシェークスピアの作の……同じにはあらず・「自然」は單なる現実ではなく、「無形の世界」、及びそれに支えられている現実である、したがって、「實際のと同じ」ではない、ということになる。

(2) 彼れが作は……造化に肖たるをいふなり・作者によつて創造された作品が、造物主によつて創造された宇宙に似ているというこの比喩は、後に鷗外が逍遙の立場を「造化無理想」と評したにもかかわらず、實際には、逍遙が超越的存在を前提としていたことを物語っている。石田氏は「文学としての没理想論は、文学における主観と客観の位置づけ、つまり個と普遍の問題を、文学外の超越的存在によつて文学を根拠づけようとする図式自体は、觀念論美学にいう美的理念と作品の關係に似ているが、美的理念は作品を通して可知のものであり、つまり美であり實在であるのに対して、逍遙の造化自然の没理想性は不可知のものであったところが決定的な相違点であった。」とのべて、逍遙は不可知の超越的存在を想定していたのだと指摘している。

(3) 心を虚平にして……偏りたりとは見えず・明治二三年の逍遙は「觀念」を真理認識の意の覚悟とする(石田氏)など、思想に仏教的な色彩を強く現している。坂井健「二葉亭四迷「真理」の変容——仏教への傾倒——」(『新潟大学国語国文学会誌』平成元・3)は、明治二三年から二四年にかけての二葉亭の仏教への傾倒を指摘し、逍遙の思想変遷との一致を指摘している。また、二葉亭の「落葉のはきよせ 三籠め」には「善惡は本来不二無差別なれとも発して行為となれば乃ち差別あり 其差別あるは凡眼にて見るか故に差別あるにてぬしなる仏の眼には差別なき(ある)にもあらずまた差別なきにもあらず」とある。

(4) 数奇失意の人は……楽園とも思へり・「落葉のはきよせ 三籠め」に「人の思想不快の感を経て形成せらるゝときは消

極的となり快感を経て組成せらるゝときは積極的となり消極的となるか故に皆苦主義に傾き積極的なるかゆえに楽主義に傾くものなるか如し」とある。

- (5) 彼の宿命教・「新作十二番中既発四番合評」には「フヘータリズム」のルビつきで用いられている。fatalism、つまり、運命論、宿命論のこと。

- (6) 彼の宿命教……造化の法相なりと評すべし・「文界名所 底知らずの湖」(『筆はじめ』明治二四・一)に様々な思想家を呑み込む「底知らずの湖」が描かれている。

- (7) 浮屠氏・ブッダの音訳。釈迦のこと。

- (8) 造化の本意は人未だ之れを得知らず・逍遙は、超越的存在を前提としながらも、不可知なものと考えた。即ち没理想である。

- (9) バイロン、スフヰト・以下、固有名詞は近代文学大系参照。なお、バイロンは「梅花詩集を読みて」の「理想」を主とする「叙情詩人」の例を引いた一節に「ダンテの如くマアロウの如くミルトンの如くカーライルの如くバイロンの如くウワーズウオースの如くブラウニングの如く」とあげられている。

- (10) ハムレットの人物論・例えば、豪華版世界文学全集『シェイクスピア』(講談社 一九七六年)解説に「優柔不断の青白きインテリから直情径行の全共闘的若者まで、いろんな人間の姿を見出だすことができるに違いない。」とある。

- (11) 納鑿・ほぞとさく。

- (12) 予嘗てドラマの本体を底知らぬ湖に喩へしことあり・「文界名所 底知らずの湖」を指す。

- (13) 「地球座」・シェイクスピアが拠ったグロブ座のこと。

- (14) 自然・「おのづから」とルビあり。

- (15) 阿世・世にへつらうこと。

- (16) 直ちに人間の本相を……描きたりしならんか・人間の本質に悟達し、客観的に描写すべきであるとの逍遙の文学観が現れている。

- (17) 案ずるにシェイクスピアは我が近松門左衛門の大いなるものか・石田氏は「シェイクスピア研究において、造化自然観ができ、またこのドラマ論ができ、そしてその内実を近松の世話物人の主人公達が埋めて行く過程で没理想論が形成されていくのである。」とし、シェイクスピア研究が近松の世話物の再評価の契機となったとする。

(18) 度・大きさ。

(19) 自然の寶石にして、人間の作為せしものにあらざらん・シェイクスピア、近松ともに「自然の寶石」であるとし、人為のものではないとする。ここに逍遙のシェイクスピア及び近松評価の基準を見ることが出来る。つまり、「小理想」を離れた作品の客観性こそが作品を「自然の寶石」たらしめているのであり、「小理想」によつては、優れた文学作品は成らぬとするものである。なお、逍遙は浄瑠璃評『天の網島』でも、近松の『天の網島』とシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を指して「二個の明玉」と評している。

(20) 十和・べんか。周の時の人。楚の山中で宝石の原石を見出し、三人の王に献じたが、詐欺と思われ、一人目には左足を、二人目には右足を切られた。三人目の王がこれを琢かせたところ、すばらしい宝石となったという。つまり、和は、琢く前の「自然の寶石」にすでに美を見出だしていたということになる。

(21) 或意味にていは、買ひ冠なること勿論なるべし・以下に引く、西洋の批評家がシェイクスピアの理想を一途に高尚であるとして、誉め讃えていることを批判するための喩。

(22) 如何なる読者の理想も其の影を其の中に見出たすことを得べし・「彼の宿命教の旨々強ち当たらざるにあらず。」までに対応する。

(23) しかしながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざるが故にあらぬか・作品に「理想」が現れていないからこそ、逆に読者は作品から無限の「理想」を感得できるとの逍遙の見解が示される。ドラマ創作の上での「没理想論」である。これのみの理由によりて理想高大なりといふは信けがたし・シェイクスピアが大詩人であるからといって、その理想が高大であるとは信じられない。この文は逍遙の二つの見解に基づいていると考えられる。一つは、作品の芸術的価値と「理想」とは切り離して考え得るとの見解、もう一つは、むやみに「理想」を云々することへの戒め、つまり、標準をもった批評への懐疑的な見解である。

(25) をさく・確かに、ちゃんと。

(26) 分析解剖を試みしに・明治二三年一二月、逍遙は水谷不倒らと近松の作の評を行ない、『日本評論』に『女殺油地獄』を掲載した。

(27) 『天の網島』、『油地獄』さては『恋飛脚』、『伊達染手綱』・各作品の粗筋については、近代文学大系参照。

(28) 当年の予が解によれば、『天の網島』の理想は、『ロミオ・エンド・ジュリエット』と兄弟の間にありて・逍遙の浄瑠

瑠評『天の網島』に「複雑なる恋を写して、かばかり自然の致を得たる、我が作物中稀に見る所也。予嘗てシェークスピアが『ロミオ・アンド・ジュリエット』を読み切つた恋のおのづからに感ぜしが、今此作を評釈するに及びて、彼れと此れと、恋の質の甚だ殊なるを認めながら、尚ほ大と小と光異なる二個の明玉をならべ見たらん心地あり。」とある。

(29) 可笑しき・『油地獄』は悲劇なので、字面に捉われず、古語の「をかし」の義でとる。

(30) 『油地獄』の解・逍遙の浄瑠璃評『女殺油地獄』に「総評。此作を読み感じて得たる所は、無限の私欲と有限の娯楽、

(31) (義理人情の浮世)との軋轢なり。「自我」と「自然」との衝突也。世間を知らぬ我儘者と世間との撞着なり。」とある。ほと／＼或理想家が釈したる『テムベスト』の理想をも凌がんとせり・「或理想家」は未詳。ここでは『テンベスト』に比されているが、逍遙の浄瑠璃評『女殺油地獄』では、お吉を殺した与兵衛の描写をダンカン王を殺したマクベスの述懐に比している。

(32) 勿論、こは理想の上のみの解なり・以下「美術家としての伎倆の上には」云々とあるように、作品の芸術的完成度と「理想」は全く切り離されている。

(33) 近松研究会・近代文学大系は「逍遙と学生有志の研究会」と注をつけているが、近松をシェークスピアに置き換えている文脈から考えて。一八七五年設立の Shakespeare Reading Society を念頭においていると考えた方が良さそうである。

(34) 是等多人数の功力にても・後の「上りつらんかし」に係る。近松の作品自体の価値もさることながら、近松が英国に生まれていたならば、様々な優れた批評家・研究家によつても評価されていたであろうから、彼等の評価によつても、地位は高まっていたであろうに、という気持。

(35) 近松の世話物も、シェークスピアの作に似て、頗る自然に肖たればなり・(17) 参照。

(36) 只其の値段付けは、人々の心々なれば・前に「自然の寶石」を「色々に値上げする」とあるのを受ける。

(37) 古人の理解を聞きて正に其の通りと思ふがその愚かなるをいふのみ・前に「しかしながら、斯くの如きは、其の作に理想の見えざる故にあらざるか。」「理想大なりとは信じ難し。」と述べて、シェークスピアの理想を高尚であると断言する古人の見解を退けた部分から続いている。なぜ、シェークスピアの作品は優れているのか。古人がいうように理想が優れているからだろうか。いや違う。それは近松を読むと分かる。近松の作品は自然そのままで。これはちょうどシ

エークスピアの作品に似てゐるではないか。それは何故か。それは、理想が古人がいうように理想が高尚なのではなくて、理想が現れてゐないからである。古人がいう甲の理想、乙の理想を鵜呑みにするのはばかげてゐる。このように、逍遙は西洋の注釈者を批判する。「余は欧文に訳して之れを泰西の文家に示したく思ふなり」と抱一庵が『郵便報知新聞』(明治二四・一〇・二八)でいう所以である。

(38) 唯其の理想をほめて、大哲学者の如く高しといふは信じ難し・逍遙は「理想」をあくまで、作品に現れる「人間の性情を活動せしむる伎倆」、「比喩の妙」、「想像の妙」から切り離して考えようとする。

(39) むしろ其の没理想なるをたゞふべきのみ・作品に作者の「理想」が現れてゐないことを讀まねば。 (23) 参照。なお、今までの「理想」は作者の人生観のような意味で用ゐられてきたが、ここでの「没理想」はドラマの客観性、つまり「理想」(人生観)が現れてゐないさまを指している。この用語の乱れを鵬外は早速指摘する(『早稲田文学の没理想』)。有と無とは二にして一ならざればにや・「落葉のはぎよせ」三籠めに「有無といふもの二ツあるやうにおもふか常なれとよくおもひ究むれば眼に触る所より云へば二ツにしてそれが存在より云へば一ツなるへし 有とは無ならざるなり無とは有ならざるなり有を去ればそれが無にして無といふもの別に存するにはあらず」とある。「有理想」か「無理想」という対立なら、シェークスピアの作品は「有理想」と答えざるを得ないだろう。その際、大か小かということになれば、当然大ということになる。したがって、古人は皆シェークスピアの作品を「大理想」としたわけだが、有無の対立を認めないならば、このような結論は避けられることになる。しかし、このような論理はやがて鵬外の非難の対象となることになる。

(41) 其の作者を神の如く、聖人の如く、また至人の如く評したるものあれど・シェークスピアそのものを指すのではないが、優れた作家一般について、このような考え方は当時広く受け入れられていた。ペリンスキー傾倒時代の二葉亭四迷や嵯峨の屋お室がその好例である。なお、ここで作者を神や聖人に見立てる見解を持ち出すことは、作者の「理想」を念頭におくことになる。

(42) 没理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた没理想と見ゆることあり・直前に作者を持ち出している点、しかも次に嬰兒の例が引かれている点を考えると、人生観としての「没理想」(これは本文中に、逍遙の定義はないが、「没理想の語義を弁す」よりも知れるように、いわゆる悟りである)を持つてゐる人物は、いつも人生観が「大理想」であるわけではなく、人生観が「小理想」である人物でも、人生観としての「没理想」を持つてゐるように見えること

がある。以上のように、読まれねばならない。ところが、シェークスピアの作は「没理想」であるから、シェークスピアの人生観たる「理想」の大小は云々できず、したがって、たとえ人生観が「小理想」であっても、優れた作品を生むことができるという文脈で読むと、作品の客観性を指す「没理想」の意味でなければならぬ。このように逍遙の中で、人生観としての「没理想」と作品の客観性を指す「没理想」とは無媒介に結びついており、のちに囂外の批判〔早稲田文学の没理想〕を呼ぶことになるが、これは逍遙の中で、人生観としての「没理想」を得た作家は「没理想」の作品を創作できる、という無条件の前提があったことを示している。これは、「真理」を感得したならば、優れた作家たりうると考えていた二葉亭の発想に通ずるところがあり、のちの「没理想の語義を弁ず」（明治二五・一）で「没理想」は「大理想」を求めかねての方便であるとの発言も、「真理」を求めかねて、悟りを目指した二葉亭に重ねあわせることができる。（前掲坂井論文）ここで、「小理想」でも、「没理想」たりうる、つまり、知識を無限に持つ大哲学者のようなものでなくとも悟りの境地に達し得る、という考え方は、二葉亭が「真理」を求めて果たせず、単に「安心」の境地を目指したのと同様に、方便として見ることができる。

(43)

嬰兒の欲の極めて小なる是れ有欲（悪）とも見るべく、無欲（善）とも見るべし・ここにも仏教的発想が見られる。無我の赤ん坊の心は、しばしば悟りの境地に例えられる。しかも、有欲かつ無欲であるから、「没理想」に、有即無、及び無我の境地を見出だそうとしていた逍遙には、自然な喩であったろうが、有即無も無我の境地も人生観としての「没理想」との関係は深いにしても、ドラマの客観性を表す「没理想」とは直接には関係がない。ところが、このような嬰兒がなぜ「没理想」なのかといえ、嬰兒は自分で自分について注釈しないからだ、すなわち、作品の中で、作中人物についての説明がされないならば、客観性が保証されるはずであるからというドラマについての「没理想」によって説明されることになる。

(44)

鬼貫が一句「なんで秋の来たとも見えす心から」此の一七字、強いて解釈の辞を作らば、或ひは仏教も掩ふべく、或ひは東西哲学の幾大系をも埋むべし・「文界名所 底知らずの湖」では、芭蕉の「古池」の句を引いて、同様の比喩がなされている。

(45)

木内宗吾の義挙には詳伝なく、木内宗吾の本名は木内惣五郎・通称は佐倉宗吾。江戸初期の百姓一揆の伝説的な指導者で、家光に直訴、死罪となったとされる。彼に関する文献は、後世のものしか存在せず、その内容も矛盾しているというが、彼については、実に多くの実録ものが出版されている。

- (46) 畢竟するに、鬼貫ら俳人の作には、当人の注釈無く、木内宗吾の義挙には詳伝なく、嬰兒の口には言語無きゆえ解釈見る者の心次第なり・作品について説明しないことが、客観性を保証するという、創作技法上の見解であるが、二葉亭が「われは明かに絶対の黙識すべく理解すべからざるを知る 絶対無限などいひて形容するときは既に其真を失へるを知る」(「落葉のはきよせ」三籠め)というように、説明では真理を表わすことができず、真理はただ感得することができるのである、との真理観が背後に見えるように思える。
- (47) 小説の体にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし。其の叙事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたかるべきが故なり・小説では作中人物について評価することを避けられないから、作者の理想は必ず現れ、作品の客観性が損なわれるという逍遙の見解。以下、例が述べられるが、こうした見解は、のちに「没理想」は「没挿評」かという鵬外の批判を受けることになる。(「逍遙子と烏有先生と」)
- (48) 芭蕉が『古池』の句・(44)参照。
- (49) 『源語』・源氏物語。『小説神髓』で盛んに引かれる。
- (50) 予は没理想の作を理想をもて評釈することのいといと要なかるべきを信する・作者が「没理想」を悟ることによって、「没理想」の作品が成立するのだから、批評家も「没理想」の態度で臨まなければならない、という三段階の考え方になっている。
- (51) 若し夫れ全体の解釈は、読者みづから之をなせ・「若し夫れ」は説き起こしの語。そもそも。読者自身が、作品から「理想」を感得すべきである、という逍遙の主張。続けて『早稲田文学』に書かれた「我にあらずして汝にあり」(明治二四・一一・一五)には「大婦一の無上の良策は、我が文章の上にはあらずして、汝が没理想の心中にこそあるべし。」とある。
- (52) 没理想の詩の無限の興味は実に其の度量の大洋の如き所にあるなり。(6)参照。